

大坂の陣、影にイエズス会

日本経済新聞社は11月15日、大阪発刊100周年を記念し、作家の安部龍太郎氏による講演会を大阪本社で開催した。大航海時代の日本と大阪」と題した講演の要旨は以下の通り。

先日、作家で元外務省主任分析官の佐藤優氏との対談で「やっと世の中が安部さんに追いついてきた」と言われた。高校の「歴史総合」の教科書に、日本の戦国時代の始まりは世界の大航海時代のせいという解釈が載っていると教えられた。

私は作家デビュリー以来、日本史と世界史を分けて教えるのはおかしい



講演する作家の安部さん
(11月、大阪市中央区)

と訴え続けてきた。日本の歴史で外国の影響を受けなかった年はない。それなのに日本史だけ分けて教えてきたから、こんでもない解釈を作り上げてきた。そんなことで国際人が育つはずはない。

大航海時代とは何か。イベリア半島のスペインとポルトガルが口火を切って世界規模の航路を開拓し、貿易と植民地化で巨万の富を築いた時代だ。イスラム勢力の支配下にあったイベリア半島を取り戻すべく、ローマカトリックは十字軍を送り続けていたが、1492年にレコンキスタ(再征服)が完成、イスラム

作家・安部龍太郎氏 本社で講演

勢力を追い払った。スペインとポルトガルは更に世界中にキリスト教を広めようと船を出した。戦争を続けてきたので軍事力はあるが、財政的には困っていた。世界中を植民地にして財政を立て直す狙いもあった。布教と貿易・植民地化はセットになっていた。

日本にはポルトガルが接近した。何を売ったらカネになるか。当時、日本は戦国時代。鉄砲を売り込めばよいと先兵隊を種子島に送り込んだ。昔の日本史には「種子島にポルトガル人が漂着した」と書いてあるが、それはウソ。ポルトガルは鉄砲を売り込み、どんどん作らせた。

鉄砲には弾が必要。鉄砲が使われれば弾と(それを発射する)火薬の需要も膨らむ。しかし火薬の原料の硝石は日本で採れず、弾の原料の鉛も4分の3は輸入品。これらの調達は南蛮貿易に頼るほかない。ポルトガルの外交官兼商社マンであるイエズス会が日本に食い

込む。戦国大名は宣教師たちと仲良くしないと南蛮貿易に参入できない。隣国より先に関係を深めないと、鉄砲が使えず負けてしまつたのだ。

織田信長が桶狭間で勝つてから10年後の1570年には30万人のキリスト教信者がいたといわれている。70万人説もある。そして信長は南蛮貿易の拠点だった堺も支配していた。ポルトガルは1580年、スペインに併合され、イエズス会のスパンサーはスペインとなる。後継者の豊臣秀吉は1587年にバテレン追放令を出す、「キリスト教は禁止するけど貿易はその限りではない」とのただし書き付きだった。

秀吉にき後の大坂は、教会がたくさん建ちキリスト教信者の解放区の様相を呈した。豊臣家は南蛮貿易とスペインカトリックの力に頼るしかない。徳川家康が恐れたのはそこで、家康はプロテスタント・オランダ・英国と手を結ぶ。カトリック対プロテスタントの代

日経大阪
発刊100年
特集



神戸市立博物館蔵「南蛮屏風(右隻)」 Photo: Kobe City Museum / DNPartcom

南蛮貿易、布教と一体

安部氏がその意義を強調した南蛮貿易の様子を描いた資料がある。南蛮屏風だ。神戸市立博物館によれば「16世紀末期から17世紀半ばを中心に制作され、90件以上が確認されている」。なかでも同館が所蔵する狩野内膳(1570-1616年)の作品は、南蛮屏風の代表的作品として知られている。

内膳の南蛮屏風の右隻には、長崎に到着した一行と彼らを迎える宣教師らが描かれている。商店には虎やヒョウの毛皮や絹織物などが並び、同館学芸課の塚原晃担当係長は「貿易と布教が一体となっていた南蛮貿易の実情を示している」と指摘する。

理戦争という意味合いもあった。

大坂の陣では、関ヶ原の戦いから15年もたつていのに、豊臣方がお触れを出した途端、2カ月で10万人の兵が集まった。歴史学者は浪人が集まったと解釈するが、それは説明がつかない。

キリシタンのネットワークが大きかったのではない。大坂方の火薬や鉛がどこから運ばれたかもなお未解決。豊臣家が堺を拠点に貿易を続け、蓄たのではない。大坂の陣は「第1次島原の乱」でもあると考えている。

大坂の陣から22年後の1637年、島原の乱でも大量の火薬が使われている。大坂の陣のノウハウが島原の乱につながったのではない。大坂の陣は「第1次島原の乱」でもあると考えている。